

---

# ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

final

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソードアート・オンライン〜神出鬼没の二人組〜

### 【Nコード】

N2567W

### 【作者名】

final

### 【あらすじ】

　　デスゲームと化したSAOの中で生きていく二人の男女。キリトやアスナ等『攻略組』がゲームクリアを目指していく中、自由気ままにこの仮想空間内を生きるとある二人の幼馴染の物語を描いた物語である。

・この物語は電撃文庫より発売中のライトノベル、「ソードアート・オンライン」の二時創作小説です。・オリジナル主人公メインの物語ですが、基本ストーリーは原作に乗っ取ります。

独自解釈やオリジナル要素が入ってくるのでそう言うのが苦手な方は回れ右を推奨いたします。

## Prologue

西暦2022年11月6日。ゲーム界を揺るがすとてもない製品が世の中にリリースされた。

『ソードアート・オンライン』

通称SAOと略されるそのゲームは初回ロットの1万本を僅か1日も経たないうちに売り切った。

このゲームの魅力は何と言っても直接神経結合環境システム、『ナーヴギア』を導入した初の多人数同時参加型RPG、VRMMORPGということであろう。

ゲームの中に飛び込む。そのゲームの中で本当に生活をしているかのような気分になれるこのゲームは買った人間を一人残らず魅了した。

そして、運良くもゲームを変えた人間が、その初めての感覚に歓喜し、酔いしれている時事件が起こった。

『ログアウトボタンの消失』

これは全神経を仮想空間に投影させるこのゲームにとって致命的ともいえるミスだった。全ての感覚を仮想空間に取り入れるため、現実世界の体は一切動かすことが出来ない。そのため内側からログアウトするほかに、一人で外に出ることは実質不可能なのだ。

そんな現象を見つけプレイヤーたちが混乱に陥る中、運営側から発表があるとのことで、1万人のプレイヤーがこのゲームが始まる

場所、『はじまりの街』の広場に集まっていた。

なんだ、やっぱりバグか……。

全プレイヤーがそう安堵の息を吐く中、このゲームの制作者、茅場晶彦やまおきひこから発せられた言葉はその期待を180°裏切るものだった。

『ゲーム内での死はそのまま現実世界での死に直結する』

彼がどういった意図でこの宣言をしたのかは分からない。

しかし、広場に集まった一万人のプレイヤーがこの言葉を聞いた瞬間、全員が一度絶望したことは確かだろう。

泣き叫ぶ者、怒り狂う者、今だ状況が理解出来ずその場に立ち尽くす者。

それぞれがそれぞれの反応を見せる中、この世界が期待していたゲームはその姿を一変させ、プレイヤーが本当の『命』をかけて戦う、正に命懸けの『デスゲーム』になった。

この物語は、このデスゲームの中で生きていくと決意をした者の生き様を描いたものである。

## 第一話：デスゲーム

カチャッ。

俺が片手剣を目の前のモンスターに向けるように構えると、金属特有の音が静かに辺りに響いた。

目の前の敵は正に異形。

人並みにでかいトカゲが二本の足で立ち、右手に剣、左手に丸い盾を構えている姿は現実世界の生物学者が見たら卒倒すること間違いなしだな、と場違いなことを思う。

「ギヤオオオオオ!!」

そのトカゲが奇声を上げながら剣を振り上げ、こちらに向かって突進してくる。俺はそれを限界まで引き付け、その刃が振り下ろされるのと同時に体を左へと傾けその攻撃を回避。

更にカウンター気味に奴の首目掛けて右手の剣を振り上げた。

肉が引き裂かれる独特の音と共に、奴の首が地面に転がり落ちる。クリティカル判定がなされ、HPバーが急速に現象していく。首が落ちているのに胴体だけバタバタしている光景はあまり見ていて気分が良いとはいえないが、このトカゲの右上に存在しているHPバーがドットもなくなると、その体を形成していたポリゴンを周囲に撒き散らしながら消えていった。

「ふう……」

トカゲとの殺し合いが終わり、まだ綺麗に輝く自慢の愛刀を腰の鞘に納めると、俺は草が地平線まで広がる草原に腰を下ろした。

「やっぱまだこええわ……」

あの史上最悪の宣言がなされてから二年。デスゲームと化したこの世界で効率よく生きていくためには、いつまでも安全な町にいるわけにはいけなく、多少危険を冒してでも外に出てモンスターを狩るのが一番だった。

第70層ともなると、流石に敵も強く、一戦一戦が本当に命懸けであり、2年戦ってきててもその感覚になれることはなかった。

「いやー相変わらず綺麗な戦い方だねーハヤト」

草原に座りながら、現実世界では滅多に見られないその綺麗な風景を眺めていると、不意に後ろから声が掛けられた。

「ナギサか？そんなんでもないよ。ほら、実際にHPバーが黄色ま

でいつちゃってるじゃ」

そういつて俺は自分の右上を指差した。それをみてナギサは「あら、ほんとだ」と言いつて俺の隣に腰を下ろした。

さつきから話しているこいつの名前はナギサ。というのはこのゲーム内での名前で、実際の名前は白鳥渚<sup>しらとりしずく</sup>。仮想空間の中にいるはずなのに、なんで俺がそんなこと知っているのかつていつと答えは簡単、現実世界でのクラスメイトだからだ。

同じ高校の同じクラスであるこいつをあの宣言がされた広場で見つけた時は、ほつとして何故だかお互いに笑つてしまった。

無論、その周囲の何人かにはおかしくなつたと思われ、哀れみの目で見られたが。

「そついえばあのスキルは使つてないの？」

俺の顔を覗き込むように尋ねて来る。こいつは意識してないみただけど、やけに顔が近い。思わず顔を離してしまった。

ちなみにこのSAOというゲームは極端に女性人口が少ない。いや、いることにはいるのだが、現実世界の容姿が反映されるこのゲームにとつてナギサ程のこつ言つては何だが 美人はそうはいなかつた。

高校でも人気があつたナギサはもちろんこつちの世界でも人気が

あり、数多くのパーティーに誘われていた。

そんな奴の顔が近くにあるということ、少し動揺しながらも問  
いの答えを返した。

「ああ。結局まだこのスキルが何なのかすら分かってないからな。  
もつと下の30階層くらいならまだしもここであれを使うのは流石  
に怖い」

「そっかー。そうだね。変なことが起きてそのままさよならーって  
いう場合もあるし」

さらっと酷いことを言う奴である。

さつきから話題に上がっているスキルというのは俺の『ユニーク  
スキル』である。このゲーム内の多くのスキルの中でたった一人し  
か持たない固有能力みたいなものだ。

まあ俺のはゲームのバグなんじゃないかと思うんだが。

なぜなら『文字化け』しているのだ。

普通はスキルウィンドウを除けば例えそれがユニークスキルだとしてもちゃんと設定された名前が存在しているはずなのだが俺のそれには名前が存在していなかった。

いや、あるにはあるはずなのだが文字がおかしくなっていて読むことが出来ない。

それゆえにそこから派生するスキルも習得することが出来ないため、通常行われるシステムからのサポートの恩恵に預かれないため、ひどく制御が難しかった。

そのためこのスキルを使ったのは50階層以前で、それ以降はあんまり使っていない。それこそこの言うようにあっさり死ぬこともある。そんなことは御免だ。

「とりあえず一回町に戻る？ここにいちや、いつモンスターが出てくるか分からないし」

「そうだな。戻って飯でも食べるか」

ナギサの言葉に頷きながら立ち上がると俺達はその場を後にした。

## 人物紹介（前書き）

人物紹介です。

グダグダと長い文章で読みにくいかもしれません；；  
読みにくかった場合はご指摘ください。

## 人物紹介

名前：神白隼人 かみしろ はやと

PC名：ハヤト

レベル：82

スキル：片手直剣スキル、曲剣スキル、索敵スキルは完全習得。適当な気分により、投擲スキルも習得。熟練度はそれほど高くはない。バトルヒーリングは一度HPバーが見えないくらいの瀕死状態に陥った時に獲得した。そのほかには趣味の釣り、軽い料理などを習得している。

エクストラスキル：比較的簡単に手に入る『カタナ』をなぜか手に入れてしまい、習得した。それ以外はとくになし。

ユニークスキル：理解不能の文字化けというバグが起きているスキル。本当に訳の分からない文字の羅列で表記されておるため、その下の派生スキルも一切習得することが出来ず、このスキルを扱うときは全て自分の管理の下に扱われる。

このスキルが発動すると、アイテムウィンドウから刀剣類の武器を4つ選択し、自分の周りの空中に待機させることが出来る。ハヤト自身これを最初に使った時は驚いたもので、「これ最早、魔法の領域なんじゃね？」とナギサに対して苦言を漏らしている。

待機させた刀剣類は任意で攻撃させることが可能。攻撃力はハヤトの筋力パラメータに比例し、スピードはそのまま敏捷パラメータに依存する。手に持つ剣もあわせて5つの剣による同時攻撃が可能なことからハヤト曰く「SAO中で最強スキルじゃないか」と言わ

れている。

しかしハヤト自身、このスキルにはあまり信頼を置いておらず、あくまでバグの下に生まれた変なスキルという認識である。

このスキルは扱うプレイヤーに絶対的な空間認識能力を要求し、それを持っていないプレイヤーがこのスキルを万が一使用した場合、剣を空中に待機させることが出来ずに、地面に落下してしまう。

人物紹介：黒髪に少し茶髪が混じったような髪色で、ストレート。髪自体はそれほど長くなく、前髪は眉毛にかかる程度の所で止めてある。髪型は基本は何もせずそのままだが、たまに寝ぐせなどで異常な程逆立つ時がある。

現実世界では高校二年生の17歳。両親と姉、兄の5人暮らしをしている。気まぐれで応募したベータテストに運よく当たってしまった。それからSAOの世界にのめりこんでいった。部活動のサッカーで鍛えた脚力と動体視力に状況判断、そして持ち前の運動神経を生かして、常識にはとらわれない動きをSAO内では繰り広げている。

ユニークスキルはベータテスト時にはなかったが、製品版をもらい、ログインした時には最初からあった。訳も分からずそのスキルを選択し、戦闘を試してみた所、やたら強い疲労感に襲われたためそれ以降はあまり使用していなかった。

だが、デスゲームの宣言がなされナギサと合流してからは、たまに気まぐれで使うような時があり、段々とこのスキルにも慣れてきている。しかし所詮はチキンなので60層以降の階では未だに使用回数0。

ナギサとは高校での同級生であり近所。所謂、幼馴染であり兄弟のように育ってきた。それ故、SAO内でナギサを見つけた時は本当に歓喜し、喜びを分かち合った。

身長は173cm。中学3年の時点で170あった身長が高校に入っても伸びると思われていたのに、まったく伸びず一抹の不安を抱いている。本人曰く「男として180cmは欲しかった」とのこと。あくまで偏見です。

性格は基本のんき。たまに変な妄想やら想像やらが暴走して人格破たんすることがあるが、数分後には自制かナギサの突っ込みが入るので問題ない。

戦闘になると、普段からは考えられないような動きを見せモンスターを翻弄する。だがやはりチキンなので、いつも戦闘の時は基本内心冷や汗をかいている。

SAO内では一応『攻略組』の枠組みに入るが、本人はそれほど熱心ではない。レベルが82とこのゲーム内でトップクラスの高さを誇るが、本人はそれを隠し続け、クエストやら趣味の釣りなどに時間を割いている。

しかしたまには、みんなの役にたちたいなあという意味のわからない衝動に駆られ、最前線に姿を現す。その時にSAO本来の主人公、キリトやアスナなども顔を合わせているが、ボス攻略後すぐさま立ち去ってしまうため会話をしたことはない。

ナギサと会うまではソロプレイヤーとして生きていくつもりだったが、幼馴染であるナギサが心配でしようがなく、パーティーを組むようになった。ちなみに他にパーティーを組むのは最前線に行つた時くらいである。

デスゲーム宣言がなされた時、本人はかなり混乱していた。家に帰れなくなるだとか姉や兄の家族に心配をかける、だとか様々なことを考えてしまい、一度は錯乱状態に陥りかけた。

しかしそこでナギサと出逢い、顔見知りがいるという安心感に満たされ通常の状態に戻る。

それ以降はナギサと行動を共にし、SAOを生きている。

？

名前：白鳥渚  
しらとりしづな

PC名：ナギサ

レベル：68

スキル：槍剣スキル、武器防御スキルは完全習得。料理もそつなくこなすが、あまりしない。とにかく安全を重視したスキル配置のため、索敵や隠蔽スキルなどもかなりの熟練度に達している。

人物紹介：茶髪にショートヘア。前髪は目にかかる程度で後ろ髪は肩にややかかる程度のもの。基本活発で動き回りたいがための髪型である。

現実世界ではハヤトと同じく高校二年生。兄が買ったSAOを興味本位でログインしたところこのデスゲームに巻き込まれた。部活動は弓道部に所属。その凛とした立ち振る舞いと、活発である性格も相まって高校ではとても人気が高かった。ハヤトとは幼馴染。中学2年のころからハヤトの事を段々と意識し始めるが、本人もずっと兄弟のように見てきたため少々戸惑っている。

弓道部で培った高い集中力と精神力を生かしSAO内を生き抜く。武器に弓がないと知った時は愕然としたが、仕方なく槍を選んだ。剣でも良かったのだが、ありきたりすぎてつまらない、という理由

から槍を選択。以降、SAO内では珍しい『槍使い』としての評判が広まり、容姿の良さも相まってアスナとSAO内では二枚看板として知られている。

身長162cm。女性としては結構高い方で、本人もこの身長に納得している。

性格は前述したとおり活発そのもの。面倒事に自ら顔を突っ込んでいき、いつもハヤトを振り回している。

戦闘ではその高い集中力でハヤトの手助けをし、補助面にまわる。実際に戦闘しても十分強いのだが、本人曰く「それはハヤトに任せとけば万事OK」とのこと。このことからハヤトの気苦労が伺いしれる。

SAO内ではかなりの高レベルプレイヤー。本人が望んでこうなったわけではないが、ハヤトと共にダンジョンに繰り出しているうちにここまでレベルが上がって行った。

決してハヤトに頼り切りというわけではなく、戦闘をしないと経験値も入らないことから、ハヤトが疲れた時は交代してモンスターを狩っている。

最前線にはハヤトと共に神出鬼没であり、いつも攻略組をひっかきまわしている。アスナとは何度か離れたことはあるがそこまで親しくはない。あまりにも気まぐれで現れることから『神出鬼没の二人組』という愛称までついた。

しかしレベルが高く実力もあるので、最前線に姿を現したときはいつも歓迎されている。

一方、どうしてそこまで実力があるのにもかかわらず積極的に攻略をしないのかという声も出ているが本人曰く「楽しんでいきたいから」とのこと。かなりの楽観主義者である。

デスゲーム宣言当初は本当に錯乱状態に陥っていたが、不意にハヤトと合流。ハヤトと同じように顔見知りがあることで救われ、以後ハヤトと行動を共にするようになる。

## 人物紹介（後書き）

どうだったでしょうか。

自分でも驚くほどに長くなってしまったのですが……。

読みにくいよ、ここおかしくない？などのご指摘がありましたら感想かメッセージでお送りください。随時受け付けております。

## 第二話：突然のクエスト

「ドラゴンの討伐う？」

あの後町に戻ってきた俺達だったがその後しばし自由行動を取った。

何も俺とナギサはいつも一緒にいるわけではなくこうしてちよくちよく自由行動をとっている。

「そそ。ドラゴンから良い感じの鉱物がとれるらしいのよ。興味あるでしょ？」

その自由行動の後、再び合流した俺はナギサが持ってきたクエストの内容をお茶を飲みながら聞いていた。そこに描かれていたのは簡単なドラゴンの絵とそのクエストに関する事項。パツと目を通したが、そんな簡単に行けるようなものではない感じがする。

「いや、確かに興味はあるけどさ。ドラゴンだろ？相当ヤバいんじゃないの？」

俺のその言葉に何故かふふんと鼻を鳴らし、誇らしげに胸を張ったナギサはすごいニコニコしながら俺の問いに答えた。

「だーいじょうぶ！どつせうら階層くらいのドラゴンだからハヤト一人で行けるっ！！」

「お前は？」

「戦うわけないじゃん、怖いもん」

「……さいですか」

わかつちやいたけどこいつって奴は……。

「安心なつて。いつも通り、資金調達は私がやっておくから!」

そういつてバシン!と俺の背中が叩かれる。ダメージは無いがそれ相応に痛い。

その痛みを堪えながら俺はナギサに向き直った。

「うむ。ではよろしく頼むぞ、ナギサ君」

「了解しました隊長。御武運を」

互いに馬鹿みたいに演技をしながら敬礼をすると、二人で顔を見合わせて笑いあった。

そしてナギサはくるりとその茶色のショートヘアを翻し、店の出口へと向かう。

「それじゃあハヤト!大丈夫だとは思っけど気をつけてね!じゃっ!」

そういつてナギサは店を出ていった。

俺はそれを見送った後、半分程度残っていたお茶を一気に飲み干すと、ふうとため息をつく。

「いやー相変わらず可愛いねナギサちゃんは。全く、なんでお前み

たいなのと……」

ふと、肩に何かが乗っかる違和感と共に声が掛けられた。

その声の方向を見ると、そこには俺の肩に肘をかけ、やれやれと首を振るカタナ使いのクラインの姿があった。

「クラインか。相変わらず失礼な奴だな。……こっちが聞きたいくらいだよ」

俺とナギサの関係はみんなにはただのフレンドということになっている。別に現実世界での友達と言ってもいいのだが、何か色々と面倒なことになりそうなので黙っているのだ。

ふと、周りを見渡せばクラインの言葉に共感した野郎共が「うんうん」と首を縦に振りながら俺の方を見ていた。

……こいつら全員オロしてやろうか。

そんなことを本気で思いはじめた矢先、クラインがテーブルの上にあるクエスト用紙を手を取った。

「ドラゴン狩りねえ……。これ、相当難しいらしいぜ?」

「……? どういうことだ?」

クラインの言葉に疑問を投げかける。確かナギサの話ではそこまで強くないと……。

「まあ確かにお前にとっちゃそれほどでもない相手なんだが問題は

そこじゃない。聞いた話じゃドラゴンを倒しても鉱物が出ないらしいぜ」

「はあ？確定報酬じゃないのかよ？」

「俺が知るか。まっ今回はかりは一筋縄じゃいかないからお前でも苦労するかもな」

はっはっは、と高笑いするクラインの声を余所に俺はこのクエストに考えを巡らせる。希少な鉱石を餌にして、毎日その体内でその希少な鉱石を精製するドラゴン。そこにはそう書かれていた。

「なあ、どっか腕のいい鍛冶屋しらないか？」

俺の質問の意図が分からなかったのだろう。クラインは笑うのをピタリとやめ訝しげに俺の顔を覗き込んできた。

「知ってるには知ってるが……そんなもんなんで今更？」

「ああ、ちよつとな」

クラインの疑問にニヤリと口元ゆがませて返すと、俺たちはそのまま話を進めていった。

？

「ここか」

あれからこのクエストについて考えた俺は、やはりこういうのは専門家に聞くのが一番だと思い、クライアントに腕の良い鍛冶屋を紹介してもらった。

町の裏道にあるこの店は、かの『閃光』も愛用していると聞いて、俺はここしかない！と思い、飛んできたのだ。

そんな訳で、今俺は第48階層の街『リンダース』にある『リズベツト武具店』の前に来ていた。

「すみませーん……」

初めての店のドアを恐る恐る開ける。このゲームをしていくうえで、この感覚には多少慣れたものの、やはり知らない場所に入っていくのは少し怖い。

体を小さくさせながら店内に入っていくと、そこには椅子に体をもたれさせながら眠りに着く少女の姿があった。

そのまま近付いて行き、まるで人形のように眠る彼女の肩を悪く思いながら揺する。

「おーいキミー……」

起きない。

というかこのウェイトレスみたいな服装で鍛冶をしているのか。すこし想像がつかないな、と思いながら、先程よりも少し強く肩を揺すった。

「はろー？生きてますかー？」

起きない。

死んでんのか。そんなことを冗談で思いながら意を決した俺は、  
今だ熟睡する少女の目の前に立った。  
そして両手を広げ

パンツンッ！！！！

「ひゃあっ！！!?」

強烈な炸裂音と共に眠っていた少女の体が飛び起きる。彼女は急いで辺りをキョロキョロと見回した後、目の前にいる俺と目を合わせた。

若干、涙目になっている。なんかすごい罪悪感に駆られるが、それをグツと堪え話を切り出した。

「あ、あの君がこの店の店主かな？」

おそろおそろ聞いてはみるものの、涙目のまま彼女はこちらをにらみ続けていらっしやるわけ。  
嫌な沈黙の後、一言だけ少女が口を開いた。

「はい」

ああ！怒ってらっしやる！もう誰が見ても分かるくらいに怒ってらっしやいますよこの子！だけでも！

そんなピンクの髪で、ウエイトレスみたいな恰好したまま怒っていても！ただ可愛いんだけなんだよお！！

……取り乱した。話を元に戻そう。

「えっと、このクエストについて何か知っているかな？」

ナギサから渡されたクエストのピラを手渡すと、少女は一瞬目を開いたが、すぐまた先ほどの怒ったような表情に戻りピラを返してきた。……だからさ、可愛いだけなんだって。

「白竜、ですか。確か回数限定の希少クエスト、ですよ。珍しい鉱物が取れるのかなんとか……」

「うん、そうなんだけど、予想以上に難航しているみたいでさ。こっつうのは専門家に聞くべきかなあと思ってきたんだけど」

やはり鍛冶屋としての本能がうずくのか、表情に出さないよう努力してはいるようだが嬉々としているのが目に映る。この調子で怒りも収まってくればいいな、と思いながら話を進めていく。

「ドラゴンを狩るだけじゃダメみたいですね。私も現場に行ったことがないので何とも言えませんが」

あっちゃー。この調子だとあんまい情報は聞けそうにないかなあ。なんか嬉しいながらも悔しそうな表情してるし。んー、無駄足だったかな……。

「そつか。しょうがないね。やっぱり現場に行つて試行錯誤してみるしかないかあ」

諦めの感じが入ったように俺が呟くと、リズベットが突如その体を乗り出してこんな提案をしてきた。

「あ、あの。わたしもこの希少金属というものに興味があるので、

連れて行つてはもらえませんか？」

……なんと。あんなに怒っていたであろう彼女が自らそんなことを言ってくれるとは。

俺としては魅力的な提案だった。やっぱりその道の専門家がいるのといないのでは、効率とかが全然違ってくるし、そもそもその鉱石を見つけたとしても俺が見分けられるかも心配だったのだ。

故に、俺がこんな魅力的な提案を断るわけもなく。

「ほ、本当か！？そりゃー助かる！是非頼むよ！」

満面の笑みを浮かべながら俺が右手を差し出すと、彼女も同じように笑い俺の右手をとってくれた。

### 第三話：encount

というわけで俺はリズと一緒に第55階層にやってきていた。第70階層の敵に比べればこの通常モンスターはそれほど強くなく、簡単なスキル一発や硬くても二発当てれば倒せる程度の敵だった。

それ故に何も心配はいらないはずだったのだが……。

「……………さむっ」

ふと、リズの口からそんな言葉が漏れた。

「おいおい、大丈夫か？」

「うん。あーもう何だってこんな氷山地帯なのよ……………!!」

そう、ここ55階層の俺達が目指す目的地は氷山地帯に設定されていた。別に寒いからといってHPにダメージを受けるわけではないのだが、それでもやはり気分は優れない。

今だ自分の肩を抱くようにして震えているリズを横目に、俺は右手を振りアイテムウィンドウを展開した。そこにある白いコートを選択しオブジェクト化させると、そのまま彼女に投げ渡した。

「ほいつ」

「うわっ、ととっ。……………いいの？」

俺の投げたコートを若干慌てながらもしっかりと受けとると、そのコートを握りしめながらそんなことを聞いてきた。

「おう。寒くてモンスターにやられましたーなんて笑い話にもならんからな」

「……ハヤトは？」

「俺は気合いと根性だけでいけんだよ」

なにそれ、と笑いつつ俺の渡したコートを羽織る。文句を言いつつも着てくれるし、なんだかんだいって幸せそうな顔をしてくれるのでこっちも嬉しくなってくる。

ああそれともちろん俺の身長に合わせているトレンチコートである。だから俺よりも身長が低い奴が着ると……

「……………ふっ」

「な、なに笑ってんのよー!!」

「似合わなすぎ……………!!」

「うるさいわねっ!!仕方ないでしょ!!身長高くないんだから!!」

もはやコート裾が地面に付くんじやないかというくらいにぶかぶかである。もちろん袖も途中までしか腕が入らず、先の方は垂れ下がっていた。

小さな子供が見栄をはって無理に大きなコートを着ているような感じがしてならない。しかもそれがまた妙に似合っていて可笑しさを引き立たせる。

溢れ出して来る笑いを必死に堪えながら俺は先を急ぐように促した。

「わ、悪い悪い。ほら、先急ごうぜ。日が暮れる前には山頂に着きたいだろ？」

「誰のせいだと思ってんのよ……………」

リズが何やら呟いているが聞こえない。

俺は雪が積もっている地面を踏み締めながら未だ聳える山頂を  
目指した。

あれから約1時間ほど歩くと今までより少し開けた場所にでた。  
見渡す限りではこれより上は無い。恐らくここが山頂なのだろう。

辺り一面に氷柱が生えており、それ以外は一面の雪景色。目の  
前には直径数十mはあるであろう穴が空いており、下を覗いてみれ  
ばリズベツトが思わず「ひええ……」と驚きの声を上げたほど深か  
った。

「白竜なんてどこにもいないじゃない……」

リズから愚痴が漏れる。確かに辺りを見てもドラゴンなんて神々  
しい生物の姿は見えず、一面の青空の雪景色が広がっているだけだ  
が……。

「気を抜くなよ。どこから現れても不思議じゃ」

俺がリズに忠告をしようとしたその時だった。

ギヤアアアオオオッ！！

突如、咆哮。

俺とリズが跳ね上がるように視線を上空へと向けると、何もなかったはずの空間に無数のポリゴンが現れる。それが互いにぶつかりくっつきあつてすぐに俺達が捜し求めていたモンスター『白竜』の姿を形作つた。

「隠れるッ!！」

俺が叫ぶとリズはすぐに近くの氷柱へと身を隠す。そして柱の陰から顔だけを出すと俺に向かって叫んできた。

「えっと!ドラゴンの攻撃は左右の鉤爪とプレス、それに翼による突風攻撃だよ!！」

咆哮の余韻がまだ辺りに反響する中、俺にそれだけを伝えてくれた。

俺はその言葉を確かに聞き取るとリズに向かって右手を揚げる。そしてその下ろした右手で左腰に差してある愛剣を抜き取ると、空中に浮かぶ絶対的な存在感を放つ白竜と相対した。

白竜はここは俺の縄張りだと言わんばかりに山頂周辺をグルリと滑空すると、突如山頂にポツリと立つ俺に向かって翼を広げ突撃を開始する。

「やっば……!！」

不意をつかれ反応が一瞬だけ遅れる。気が縮む思いで横っ飛びすると、俺が先程までいた場所を白竜が滑空していく。奴はものすごい量の雪を巻き上げながら再び空へと舞い上がった。

空へ上がられてはどうしようもない。普通のRPGならば魔法

等で対処するのだろうか、生憎SAOにそんなものは存在しなかった。

今度こそは、と俺は再び剣を構える。不意打ちは二度は通じない。今度こそ捕まえる

！！

白竜は再び空を旋回すると先程と同じように俺に向かってきた。剣を正眼に構えそれを迎え撃つ。今度はサイドステップで突進を交わすと交差法気味に通り過ぎていくデカブツを一閃。

相当な衝撃に剣を持って行かれないように両手で剣の柄をにぎりしめる。

「っ　　っ　　うおおらぁッ！！」

そのまま剣を振り抜く。

無数の鱗を撒き散らしながら白竜は苦悶の声を漏らした。そして……

再度、咆哮。

最早飛ぶことは止めたのか、その強靱な両脚を地に付け、怒り心頭といった様子で俺を見据えて来る。

水晶のように透き通った瞳が俺を見据える。

ようやく奴を地に引きずり下ろした。後は攻撃をかい潜って奴にダメージを与えるだけ。奴との距離はそう遠くはない。

白竜はまた咆哮をあげると体を反らしその口に息を吸い込みはじめた。ブレスの予備動作だ。

(……………！しめた！！)

咄嗟にアイテムウィンドウを開き投擲アイテムであるダガーを選択。それをブレスを吐こうと大口を開けている白竜へ投擲。それと同時に走り出した。俺の投擲スキルはそれほど高くは無いが、あれだけの出かければさすがにあたる。

まさか予備動作中に攻撃されるとは思っていなかったのだろう、白竜は飛んで来るダガーに対応出来ずそのままそれは口内へと突き刺さった。その痛みにより白竜が『一瞬』怯む。

その『一瞬』の内に俺はドラゴンの懐へと潜り込み両手大剣スキルを発動。青いエフェクト光を発しながら大剣は弧を描き白竜の体を切り刻んでいく。

目にも留まらぬ四連撃。足元に集中された攻撃で白竜は完全に体制を崩し、地にその巨体を放り投げた。

まだHPバーは残っている。俺は止めをさそうと大剣を握った両手を振り上げ

「すごいよハヤト！！強いとは思ってたけどこれほどとは！！」

不意に、リズの声が聞こえた。

そのことに動揺したのか俺の両手は振り上げたまま止まっていた。俺は慌ててリズに向かって制止の声を叫んだ。

「ば、バカ！！まだ出てくるなっ！！」

完全に倒れたかと思っっているのかリズは白竜のすぐ傍までやってきている。

「な、なんで？もう倒したんじゃない  
「リズッ！！」  
きゃあっ！！！！」

時間が経って意識が戻ったのか、ドラゴンは態勢を立て直していた。

そしてそのまま近くにいたリズベットを尻尾で強襲、その衝撃で余りにも簡単にリズベットは宙に舞ってしまった。

「くそっ！！」

落ちるその先は最初見たときリズベットが恐怖していたあの穴。俺は持てる限りの力を振り絞りリズベットへと駆け寄る。

穴へと吸い込まれていくリズ。俺はそれを見ると走りながらスキルウインドウのある部分をタッチした。

穴へと迷い無く飛び込む。重力に従い落ちていく中、俺はリズに手を伸ばした。

「手を掴め！！」

俺の言葉を聞かぬやいやすぐにリズは右手を俺の手に伸ばしてきた。

俺はそれを掴むと自分の方へリズを抱き寄せ、自らのスキルを展開させた。左腕でリズを抱える。そして残された右手を空中に水平に走らせると途端に俺の周囲に4本の剣が現れた。

その内、大剣の一本を俺の足元に移動させ足をかける。大剣の腹をボードのようにして乗ると落ちるスピードが次第に減速していった。

しかしそれも束の間。俺達の体重に耐え切れなくなった大剣はすぐに下降を始め速度を速めていく。

「やっぱ……！！」

咄嗟に自分の体を下にしゃがて来るであろう衝撃に備えた。

そして、着弾。

まるで爆発でも起こしたかのように周りの雪を巻き上げ俺達は地面に叩き落ちた。

なんとか意識を保ちながら強打した頭を押さえつつ目を開くと、目の前にはリズの顔。いつもなら恥ずかしくてそらしてしまう目線も、そんなことは気にならなかった。

「生きてる?」

「うん」

たったそれだけ。それだけの言葉を交わした後、俺たちは互いに笑いあった。

「ははっ。あっはっはー!!」

本当に死ぬかと思ったからこそその心からの笑い。生きている事が不思議でしうがなく、今は笑うしかなかった。リズは俺の上からどくと、感謝の言葉を口にした。

「ありがとうね。ハヤトが助けにきてくれなきゃ、今頃私は……」

「いって。パーティーなんだし、助けるのは当然だろ」

リズが何を言おうか分かっていたので、遮るような形で返事を返した。一瞬ポカンとなってこっちを見つめてきたが、すぐに笑顔に

なるともう一言だけ、ありがとうと言って空を見上げた。

「白竜、もうこないかな」

若干、不安気に空を見上げながら呟く。俺も同じように空をみると、時折咆哮を上げながら白竜が穴の周りを低空飛行していた。確かにパツと見は今にも入ってくるかのような仕草だが、幸運にもそんな気配はない。俺はそれを確認すると、地面に突き刺さっている5本の内の1本を抜き取り、左腰の鞘におさめた。

その後、展開していたユニークスキルも解除する。解除すると、突き刺さっていた残りの4本がポリゴンをまき散らしながら空気中へと消えていった。

「大丈夫だろ。多分ここは不可侵領域だ。幸いモンスターもポップしないようだしちょっと休憩しよう」

「あ、うん」

一通りの事を終わるとリズに声をかけて俺も地面に腰を落ち着かせた。

そしてアイテムウィンドウを操作して、ポーションを二つ取り出す。

「ほれ」

2つ取りだした内の1つをリズに投げ渡し、ジェスチャーで飲むように伝える。リズは「ん」とひとつだけ返事をする。栓を抜きとりその中の液体を口に流し込んだ。

俺もそれを見て同じようにポーションを飲み干す。甘いような酸

っぽいような訳の分からない味が口の中を満たすと同時に俺のHPバーが黄色になっていたのでから安全圏の青にまで回復していった。

ポーションを飲んだ後、空の瓶を破棄しもう一度空高くにある穴の出口を見上げる。まるで光の円のように見えるそれは、思った以上に高くても登れるようなものじゃなかった。

「どうしたもんかねえ……」

脱出方法が見つからない。俺が頭を悩ませていると、リズが横から話しかけてきた。

「転移すればいいんじゃないの？」

「やってみ」

俺がそう言うとリズは訝しげに俺の方を見ながらも、メニューを操作し転移結晶を手の上にオブジェクト化させた。そして一言叫ぶ。

「転移！リズダース！」

……………何も起きない。

とうか起きるわけがないのだ。ここは元々プレイヤーを落とすための罠みたいなもの。そんな簡単に抜け出すことが出来たのなら罠の意味がないし、作る理由も存在しない。

「結晶無効化空間……？」

「正解」

よくできましたーと褒めてやると、なぜかリズは顔を赤くして俺に詰め寄ってきた。

「分かってるなら何で教えてくれなかったのよ!！」

「面白そうだったから」

むきゃーと言った風に怒るリズ。やっぱりこいつ面白い。いつまでもからかっていたい衝動に襲われるが、生憎そんなことをしている暇も余裕もないのでさっさと脱出方法を見つけるため頭を働かせる。

穴の中全体を見回した所、抜け道や通路のようなものは存在しなかった。ここはダンジョン扱いだからナギサとかに助けを呼ぶこともできないし、まして穴の高さは70m以上はあるだろう。

「ロッククライミングしてみようぜ」

「……は？」

意味が分からない、といった様子のリズを目で黙らせると、メニューを操作して短剣を二つ両手にオブジェクト化させる。そしてそれを逆手に持ち、壁の近くまで行く。

そして出来るだけ高くジャンプして距離を5mほど稼ぐと、そのまま右手に持つ剣を壁に突き刺した。

そのまま左の剣を少し上に刺し、腕だけの力でそれを昇っていく、という計画だ。

と、いう計画だったのだが。

「……あれ、抜けねえ」

左手の剣を刺したまでは良かった。次に右手の剣を再び上の方に刺そうとしたときアクシデントが起こった。

壁に突き刺さったままの剣が全く微動だにしないのだ。思えばこんな足が宙ぶらりんの状態で力など入るわけもなく、ジャンプの衝撃を完全に抑えようと思ったため深くまで入った剣を抜くことなど出来るわけがないのだ。

「あ、これ無理だわ」

俺は即決すると剣から手を離し落下する。今回はさほど高くはないのでダメージはないが、結局雪を大いに巻き上げただけの結果になった。

雪煙りが晴れていくとそこにはリズの冷たい視線。

「……あんたバカ？」

「……うるさいよ」

軽く傷ついた。

第三話・・・eccocott（後書き）

とりあえずあと二話ほどはリズム編が続きますが、ご了承くださいm  
——) m

## 第四話：解り合う二人

結局脱出の糸口も見つけられないまま、時間は過ぎていった。

上空を見上げれば、穴の底を照らしていた夕陽も沈み辺りはどんどん暗くなっていく。やがて陽が完全に没すると、穴底は何も見えないくらいの暗闇に包まれた。

アイテムウィンドウからランタンをとりだすと、火を灯し地面に置く。火の暖かさで置いた周辺の雪が解け液体となって地面を濡らした。

「暗くなって不用意に動き回るのもアレだし、今日は野宿だなあ…」

リスにとっては嫌なことこの上ないことだろうが、この際仕方がないのだ。

暗い分、辺りが見えず何かしらの怪我を負う可能性が大きくなってしまふ。そんな時は動かないことが一番利口な手段だと俺は考える。

「仕方ないわよね。でもそんな道具あるの？」

リスの疑問に俺は得意げに鼻を鳴らすと、アイテムウィンドウを操作して愛用の野営グッズをオブジェクト化させた。ベッド二つにテント。それに鍋に火に様々な食材。ちなみにテントの中は暖房も付いている優れ物である。

「アンタ、こんなのいつも持ち歩いているわけ？」

目を丸くさせ驚きを隠せないといった様子でリズが俺に問いかけてくる。

大体一人とかナギサと二人で狩りに行くときに、こういうのを持っていく役割は俺なのでいつの間にかこのセットを持っていくのが当たり前になってしまっているのだ。

「おう。こんな風に野宿するのも珍しいことじゃないからな。何時でも俺は準備万端だぜ」

呆れているのか感心しているのか、それとも両方なのか色々が混ざったような視線を送ってくる。そんな視線は送られ慣れてるぜ。最前線に行った時も、こんな時があったがああ時はもつと人数が多くて流石の俺もくじけそうだった。でももう一人俺みたいなのがいてそいつとは何か通じ合える気がした。……話してないけど。

「まっいいから寝てみるって。このベッドすごい気持ちいいんだからな」

そう言っただけ俺はベッドに飛び込む。

見た目はやや固そうだが実はそんなこともない。飛び込むと体を包み込むように、ふかっという感触があり三分も横になっていればすぐに眠れそうなのである。

「うわっほんとだ。ふかふか」

隣を見ると俺と同じようにベッドに顔を埋めて触感を堪能して

いるリズの姿。気に入ってくれたみたいである。

「さて、飯にするか」

さすがにいつまでも感触を楽しんでいるわけにはいかないの、俺は立ち上がると出した食材を使って料理を作りはじめる。……うん、パスタとかでいいかなこれなら。

「料理なんて出来るの？」

「それなりにな。ソロプレイするときには結構大切なんだよ」

食材を切りながら質問に答えた。切った食材をフライパンに入れて炒めていく。ナギサから貰ったお手製の調味料を振り掛けると穴の中に香ばしい匂いが広がっていった。

「ふーん……」

ベッドに腰掛けたままリズは何故か押し黙る。何かを聞きたいけど聞けない、といった様子だ。まあ何を聞きたいのかは大体わかるけどな。

さて、最後に少し固めに茹でたパスタ（自家製）も入れて炒めていた食材と混ぜ合わせると、SAO版ペロンチーノもどきが完成した。出来たそれを皿に盛り付けリズに手渡す。

リズは両手で皿を受け取ると、どこにあったのかフォークを取り出し食べはじめた。

「……………おいしい」

「そりゃあ良かった」

どうやら満足していただけたらしい。俺も自分で作った pasta をフォークで巻き取って口に運んだ。

……………うん、まあこんなものだろう。ナギサの作ったのに比べれば数倍は劣るものの、自分的には満足のいくものに仕上がっている。そうやって俺達は談笑をしながら時間を過ごしていった。

「さて、そろそろ寝るかあ」

俺がそういってベッドに潜り込むと、隣のベッドにリズが潜り込む。

そして顔を見ると、ふと目が合った。

沈黙。

あんまり意識していなかったけどこんな風に異性の誰かと寝るのは（決してそういう意味ではない）ナギサを除くと初めてだった。ナギサと初めて野宿した時もこんな感じの気恥ずかしさがあり、

会話もあまり無く睡眠についてしまった記憶がある。

やばい、恥ずかしいぞこれ。

そんなことを思いながらも俺達はどっちも目をそらそうとはしなかった。

何分かくらいそうしていると急にリズムが笑いはじめた。俺もそれにつられて笑ってしまう。

「なんか不思議な感じがする。誰かとこんな風にするのって初めてだから」

どうやらリズムもおなじような感じだったらしい。

「まあ鍛冶ばっかやってひきこもってそうだからな」

「そ、そんなことないよ!!」

真っ赤になって否定する彼女を見てまた笑う。それを見たりズは何か言い返そうとしていたがそれを飲み込んだ様子で、深刻な感じに表情を変えて口を開いた。

「ねえ、ちょっと聞いていい?」

「おう」

何を聞きたいのかは分かっているつもりなので即答する。リズムは目を閉じて少し黙ったが目をあけると質問をしてきた。

「あのスキルは……?」

予想通り。余りにも予想通りすぎてまた笑いそうになるがそういう雰囲気でもないので堪えて質問に答えた。

「俺のユニークスキルだよ。名前はわからないけど最初から俺のスキル欄にあったんだ」

「名前がわからない……?」

「文字化けしてるんだ」

俺の言葉を聞いた途端リズは頭を抱えた。何かもう訳がわからないといった様子で。

「変だ変だとは思っていたけどまさかここまでとは……」

……そんな風に思われてたのか。

リズの衝撃告白に心をくじかれそうになるがグツと堪える。ここで負けたら男じゃねえ!!

「それで、どういったスキルかきいてみてもいい?」

「あいよ」

俺はリズの要望に応え、俺の訳のわからないスキルについて説明していった。

スキルについての説明を一通り終わるとリズが口を開いた。

「とんでもないわねえ……」

「だろー？」

それだけ言っただけで乾いた笑いを漏らした。このSAOという世界の中で剣を空中に待機させるなんてことが出来るのは俺くらいのもんだ。何せこの世界には『魔法』という概念が存在しない。Sword Art Onlineというほどのだから全てが『剣』で構成されている。『ソードスキル』といった類のものもそういうわけであるし、槍や棍棒などもあるにはあるが、使う人はそんなにいない。ちなみにナギサは槍使いだ。

「じゃあ後もう一つ質問」

「ん？」

布団から手だけを出し、人差し指を立てながらリズはそう言った。寝ながらやっているものだから結構無理な角度で手首が曲がっている。結構つらそうだ。

俺がそんな関係のないことを考えていると、リズは再び重い口を開き言葉を紡いだ。

「どうして、あの時助けてくれたの？」

あの時                    というのは穴に落ちた時のことだろうか。

「逆に聞くが、なんでそんなことを聞くんだ？」

俺にはその理由を問う意味がわからなかった。なぜなら、そんなことは分かりきっているはずだから。

「だって、下手したら死んじゃうかもしれないんだよ？助かる保障なんてどこにもなかった。ハヤトのそのユニークスキルがあったとしても、助かる確率なんてほんとに低かったのに……」

なるほど。どうして自分の命を賭けてまで、私を助けたのか、とつまりそういうことが言いたいのか。

ここでの『死』は現実世界での『死』に直結する。これはただのゲームではない。HPがなくなって死んでしまったら都合よくリセットなんてことはできないし、ゲームオーバーになったらコンティニュー画面が出ることもなくただ死んで行ってしまふ。

それが分かっているからこそその疑問なんだろうなあ、と俺は思った。

「なんでかと、言われてもだなあ。俺にはそれが当たり前のことだったし、理由なんていらなと思う。ただあえて言うとするならば、『死なせたくなかった』それだけだと思うよ」

それに仲間を死なせたら夢見が最悪だ、と俺は笑いながら付け足す。本当にそれだけだ。というかあの時はリスを助けることで頭がいっぱいでそんなことを考える余裕もなかった。気が付いたら走り出していて、穴に飛び込んだ。だからそこに確固たる理由なんて

存在はしなかったのだ。

俺が笑っていることに疑問を感じたのか、未だ納得しないといった様子でリズが再度口を開く。

「キミは、死ぬのが怖くないの……？」

本当にどうして。リズの言葉からはそんな感情が読み取れた。必死の思いで声を出したのだろう、その声は震えていて、目は今にも泣きそうだった。

「怖いに決まってる。まだ現実<sup>リアル</sup>世界でやり残したことなんてたくさんあるし、こんな訳の分からない中で死ぬのなんて、それこそ死んでも御免だ」

じゃあどうして。言葉には出さないが目で俺に訴えかける。俺はその目を見て続けた。

「だけど、自分の命欲しさに他人を見殺しにするなんて嫌だ。二人とも助かる可能性があるのにもかかわらずに、だ」

「でもっ！！二人とも死ぬ可能性だっであつた！！」

リズの出した大きな声は穴の中で反響を繰り返して、出口へと飛んでいく。

必死の思いで反論したリズの目からは大粒の涙があふれ出し、体が震えているのが布団の上からでも見て取れる。それは、決して寒さのせいだけではないだろう。

「そうだな。だけど俺は助かる可能性に賭けた。もちろん死んでや

るつもりなんてなかったし、絶対に助かるとどこかで思っていたんだと思う」

泣いているリズの頭をそっと撫でる。正直、すごい緊張したけど泣いている誰かを落ち着かせるにはこの方法が一番だと思った。人の温かさを感じられることで、人間は安らぎを得られると何かの本で読んだこともあったから。

暗い暗い穴底にリズの嗚咽だけが響き渡る。それはとてもとても小さな声で、10mほどの穴底にも反響すること無く暗闇の中へ消えていった。

「一つだけお願いしてもいい？」

「なんだ？」

「私が寝るまでずっとこうしていて」

……ヤバい。いろんなことが初めてすぎて頭がうまく回らない。頭を撫でるなんてことをしたのは、ナギサ以外にしたことはないし、こんな要求をされるのは生まれて初めての経験だ。

顔が熱い。多分今俺は相当赤くなっているんだろう。辺りが暗くて本当によかったと切実に思う。

「……おう」

心臓の音がバクバク煩い中、その一言だけを必死でひねり出した。

「ありがとう……」

俺のその言葉を聞いて安心したのか、リズは幸せそうに笑うと徐

々に目を閉じていった。そして規則正しい寝息を立てながら眠りに入った。

『ありがとう』。この一言だけで俺は今日一日分の苦勞が報われた気がした。とてもささいなことだけど、それだけで本当に幸せな気持ちになれる。

頭をそつと優しく撫でる。リズの髪の毛はとてもさらさらしていて、俺にはとてもそれがゲームの中のものとは思えなかった。

## 第五話：Claim Solais

目が覚めると辺りに香ばしい香りが出ていることに気付いた。日は既に昇っていて穴底まで朝日が入り込んですっかり明るくなっている。

香りがしている方向に視線を送ると、エプロンを着たりズが鍋を使って何かを作っていた。きっとスープか何かだろう。

俺はベッドから少し気怠い体を起こすとリズの方まで歩き出した。足音に気付いたのかリズは鍋から眼を離すとクルリと反転し俺を見る。

「おはようハヤト。少し寝過ぎじゃない？」

少しからかうような感じに尋ねて来る。時刻を見れば既に9時を回っていた。俺はいつも7時くらいに起きているから確かに少し寝過ぎたかもしれない。

「おはよう。誰かさんのせいで昨日は散々な目に遭ったからな」

仕返しとして冗談混じりに反論を返す。もちろん本心で言っている訳ではない。リズもそれを分かっているため少しだけ頬を膨らませると鍋の中身を掻き混ぜはじめた。

「今朝食作ってるから。ハヤトには及ばないけどまずくはないはず」

「ああ、ありがとう助かる」

作ってくれるというのなら断るはずがない。俺はお礼だけという、その隣に座り朝食が出来るのをノンビリと待った。

リズが作ってくれた朝食を食べ終えると俺達は昨日に引き続きこの穴から出る方法を模索し始めた。

しかし、一日寝ただけで策など思いつく筈もなく、俺達はまた苦戦を強いられていた。

「実際この穴って何なんだ？トラップにしてはあからさますぎるし、強いモンスターが出る訳でもない。ただの穴といえばそれまでだけど……………」

落ち着かない俺は歩きながら考えを巡らせる。考えることで頭が一杯だったのか、地面から出ていたナニカに躓くと俺は派手にコケた。

「いってえ〜……………」

「…………ぷっ」

頭をおさえながら起き上がる。コケたことが面白かったのか隣でリズが口を手で抑えて笑いを堪えていた。

「笑ってんじゃねえよ……………つと?」

笑っているリズに愚痴を漏らしながら躓いた所を見てみると、ナニカが太陽の光に反射して輝いているのが目に映った。

「なんだこれ？」

雪に埋もれているそれを両手で掻き出してみる。それは段々と姿を現し、最後には完全にその姿を晒した。

「これは……………」

「クリスタライト…!!」

太陽の光に照らされて、水晶の限界まで磨ききったような輝きを放つソレは俺たちが今回のクエストでまさに狙っていたものだった。街の人たちに聞いても詳細は一切分からなかったこれが今俺の手の中にある。すごい偶然に俺は少し放心状態になっていた。

「ハヤト、ここって……………」

リズが言葉を濁す。

俺も同じことを思っていた。あの白竜は水晶を食べて成長する。そしてそれを体の中で蓄え、希少な鉱物を精製すると書かれていた。ということはその精製されたはずのものがあるということはここは

ギヤアアオオオオ!!!

俺とリズが同じ結論に至った瞬間、聞き覚えのある咆哮が雪山一帯を支配した。この地の王　白竜が自らの支配する地の巡回を終え帰還した。穴の出口からその神々しさをも持つ体を目一杯に広げ、地に降りる。そして侵入者を見つけた王はそれらを排除するための行動に移った。

「ヤ、ヤバイヤバイヤバイ!!!」

「早く！！こつち！！」

突然の出来事にクリスタライトを手を持ったまま硬直してしまつた俺を、リズの声が解放してくれた。俺に向かつて飛来してくる白竜の鉤爪を皮一枚でかわすと、リズが身を隠している水晶の柱へと身を隠す。この穴底に存在するこれらは破壊不可能オブジェクトでありドラゴンの攻撃によって壊されることはない……はず。

「どつするのよ！こんな狭いところじゃまともに戦えないわよ！」

狭い物陰に身を寄せ合つて隠れる。リズからの怒声が飛ぶ。俺もそのくらいわかつていた。

水晶柱は四つ。この直径10mほどの穴底でそれらをうまく活用してあの白竜と戦えるかと言われると、難しいと言わざるを得ない。上のような開けた場所なら倒せる自信はあるが、如何せんこの穴底は狭すぎた。

「あ

「何か思いついたの!？」

行ける。これなら戦わずとも外に出られる！わざわざ翼をもつ生物が降りてきてくれたのだ。それを使わない手はない。

「悪いリズ。少し目をつぶっていてくれ」

「ふえ？　　ちよ、きやあ！！」

未だ状況を読みこめていないリズだが、生憎状況を説明している暇などない。

俺はリズの体を左手で抱え込むように担ぐと、柱の陰から抜け出した。獲物を見つけた、と言わんばかりに白竜の水晶のような瞳が俺を凝視する。しかしそれは一瞬のことで白竜は咆哮するとブレスの態勢に移った。

ブレスが白竜の口から吐かれると同時に俺は穴底を円を描くようにして回り始める。俺が出せる限りの全速力。周りの景色が飛ぶように流れていく。ブレスを回避し、半周したところで急ブレーキをかけた。

ブレスの反動で白竜は未だ動くことが出来ない。俺は跳躍し、未だ硬直状態にある白竜の背中に飛び乗った。

ゲアアアアアアア!!!

背中に乗った違和感に白竜は体を揺さぶる。鱗に必死でつかまりながらそれをやり過すと、白竜は翼を大きく広げた。穴底にもうすぐでぶつからんばかりに翼を広げると穴の出口に向かって急上昇を始める。

「まってましたああああ!!!」

白竜の背中につかまりながら叫ぶ。急上昇によって生じる強風に全身を晒しながら、俺は喜びをあらわにした。光が大きくなっていく。そしてどんと近くになっていく光は、円形の出口を超えると俺の眼前一杯に広がって行った。

「リズ!!!眼を開けてみる!!!」

俺にそう言われてリズが恐る恐る瞼を開いて行く。途中まではビクビクしていた瞼も途中から目の前の広大な風景を写すと、一気に

パツと開いて行つた。

「わぁ……!!」

リズが感嘆の声を漏らす。それほどまでにこの景色は綺麗だった。真つ白な山の麓には小さな村が見え、それ以外は一面の雪景色。雪も降らず空は快晴で雪がキラキラと太陽に反射している。上を見ても下を見ても眩しくて、本当に綺麗としか言いようがなかった。

地上40m程行つたところで白竜の背中から手を離した。体が浮遊感に包まれるが恐怖は全くない。リズと手をつなぎ共に地上へと落ちていく。

「楽しかったよ!!ありがとね!!」

「俺もだ!!またいこう!!」

「うん!!!」

強風の中で言葉を交わす。ほとんど声は聞き取れなかったけど、目の前にいるリズの表情と辛うじて聞き取れた言葉の断片から読み取っていった。

色々大変だったけど本当に楽しかった。あつという間に過ぎてしまった時間を落ちていく中俺はずっと思い返していた。

?

雪山を下り、俺たちは再びリズベットの店に戻ってきた。

何で戻ってきたか、それは手に入れた『クリスタライト・インゴ

ツト』を素材として、俺の武器を作ってもらったためだ。俺の剣はほとんどがアイテムドロップで手に入れたもので、オーダーメイドで作ってもらったものはない。そういう機会も今までなかったし、知り合いもいなかったから作るうとも思わなかった。

だけど、雪山から降りてくる途中、リズが「クリスタライトで武器を作らない？」と言ってくれたので、それを了承したというわけだ。鍛冶スキルがない俺がクリスタライトを持っていても宝の持ち腐れだったので、俺としてもそれはありがたい提案だった。

「どうだ？いいの作れそう？」

例の鍛冶スタイルに着換えたリズに声をかける。ハンマーを持つ姿は流石に様になっていて、心強さが感じられた。

「んー、やってみなきゃわからないなあ。私もこんな鉱石使うの初めてだし、武器の製作自体も結構シビアだから」

そう言いながらインゴットを火に入れ、リズは武器を作り始めた。ここからは職人の領域なので俺の立ち入る隙はない。今の俺に出来ることと言えば、リズの集中力を削がないように、じっと黙っていることだろう。

そう思った俺は、椅子に腰をかけカーンカーンと心地よく響くハンマーの音を眼を閉じて聞いていた。

？

「おーい、起きろー。出来たぞー」

む……。何時のまにか寝ていたらしい。眼を開くとリズがハンマ  
ーを抱えて俺の前に仁王立ちしていた。一瞬それで殴られるかと思  
ったが、そんなことをした覚えは一切ないのですぐに頭を切り替え  
る。……正直ビビった。

「ごめん、寝ちゃってた。出来た？」

「まったく……出来たよ。ほら」

リズはため息をつくとアイテムウィンドウを操作し、一つの剣を  
オブジェクト化させた。瞬間、辺りが光に包まれる。

「まぶしっ……」

腕で眼を覆って眩しさを防ぐ。5秒ほど経ってその輝きが徐々に  
薄れていくと、俺はようやくその剣を直視することが出来るようにな  
った。

その剣は、まるで神々しさを具現化したようなものだった。それ  
と同時に俺は、ああなるほど、となぜか納得してしまった。この剣  
は『クリスタライト』のあの神々しさをそのまま引き出しているの  
だ。白竜が剣になったらこんな感じなのかなあ、と意味もわからない  
ことをふと感じる。水晶のように透き通っている剣は一見すると  
脆そうに見えてしまうが、そんなことはなかった。

リズから剣を受け取ると、俺は両手に構える。手にかかる重さが  
心地いい。二、三度振ってみると、剣がたどった軌跡に白銀の粒子  
が舞い散った。

「剣の名前は『クラウド・ソラス』ね。確か何かの伝説にあったかな  
？」

『クラウド・ソラス』。確かケルト神話にあった神剣……。なるほど、確かにこれは神剣にふさわしいものだ。

「……すげえ」

それしか言葉に出なかった。他に色々な言葉が浮かんだけど、口から出たのはその一言だけ。そんな俺がおかしかったのかリズはクスクスと笑いを漏らした。

「気に入ってもらえたかな？」

「当然!!」

これを受け取って不満な人間などこの世にいるのだろうか。そんな奴がいたら直々に会いに行って一発くらいグーで殴っても文句は言われないだろう。

「本当にありがとう。大切にに使わせてもらうよ」

「喜んでもらえたようだなにより」

互いに笑顔で言葉を交わしあう。なんかこの剣をアイテムウィンドウに収めるにはとてもおもしろい気がする。

「なあリズ。鞘ってあるかな？」

「鞘？」

「うん。ずっと実体化させておきたいからさ。なにか収めるものがほしいなあ、と」

「りょーかい。ちょっと待ってて」

そう言うとりズは工房の奥へと入って行った。俺はその間にもう一度このクラウ・ソラスを構えて何度か振ってみる。そうしてソードスキルも試してみたりしている間にリズが工房の奥から帰ってきた。

「これとかどう？」

そういつてリズが差し出してきた鞘は、一目で大事にされていたものだとわかった。しっかりと細部にまで手入れがされており、大事に磨かれていたのだろう。

表面に一転の曇りもないその鞘を受け取ると、鉄の冷たさが手に伝わってくる。金色をベースに黒と白で装飾が施されている鞘の中心には大きなルビー、サファイア、エメラルド、ダイヤモンドが四つ埋め込まれており、その中心には一際輝きを放つクリスタルが埋め込まれていた。

「こんなのもらってしまっているのか？」

俺の質問にリズは満面の笑みでこう答えた。

「いいよ。その剣に釣り合う鞘がこれしかなかったし、何よりハヤトにはもっと大切なものをもらったからね」

「……そっか」

リズの言葉にウソは感じられなかった。だから俺は有り難くその行為を受け取ると、クラウ・ソラスをその鞘へと収める。そして腰

の後ろのベルトにそれを巻きつけ固定すると再びリズにお礼をいった。

「本当にありがとう。この二日間、本当に楽しかったよ」

「それはこっちのセリフだよ。久しぶりにあんな刺激のある体験させてもらったし」

そう言って互いに笑いあうと、俺はリズに提案をした。

「剣のメンテナンスとかでまた来てもいいかな？」

リズは俺の言葉に一瞬呆けたが、意味を理解するとすぐに笑顔になりこう言ってくれた。

「もちろん。その剣は私とハヤトにしか触らせないよ？」

ニヤリ、とリズは口をゆがませる。俺もつられてニヤリとしてしまった。

しきりに笑いあうと、俺はドアへと歩き出し、不意にその歩みを止めた。

「そつえば」

「ん？」

「大切なものって？」

「……それは教えられないよ」

言葉にできるものじゃないからね、とリスは笑った。

## 第五話：Claim Solais（後書き）

次回からすこし過去編に入りたいと思います。

正確にはハヤトとナギサがSAOに入ったときの話で、どうやって二人がここまでの実力をつけていったかを書いて行く予定です。次の話まで少々お待ちください。

## 第六話・あの日（前書き）

この話から過去編に入ります。ハヤト達がどうして強くなれたのか、どのようにして死の宣言を乗り越えたのかを描いて行きたいと思います。

## 第六話：あの日

俺の平和な毎日は、本当に、何の前触れもなく突如として終わりを告げた。

今考えてみればどうしてこんなゲームに手を出してしまったのか、それだけが頭の中を支配する。俺だけならまだしも、幼馴染の渚までも巻き込んでしまった俺は、この デスゲーム が始まった瞬間ひどく後悔していたんだ。

? ? ? ? ?

あの日、俺は学校のホームルームが終わると同時に席を立ち駆けだした。

時刻は既に4時。外は陽が傾きかけていてやや赤くなっていた。これから下校する者、学校に残って友達と談笑していく者、新人戦などが近い部活はこれから部活の準備を始めるところだった。

俺はというと普段ならサッカーの練習があるのだが、その日に限って前日が試合だったということもありオフをもらえることとなったのだ。

少し赤く染まった廊下を人の間をすり抜けながら駆け抜けていくところどころぶつかりそうになった所もあったがそんなのを気にしている余裕はなかった。この時の俺はある一つの事で頭が一杯だったのだから。

1階に続く階段を下ると下駄箱に出た。いつもなら部室のロッカ一方に外靴は置いてあるのだが、今日はさっさと帰るために事前にこちらに靴を移していたのだ。

階段を駆け下り下駄箱に着くと、一人の見知った少女が友達と談笑しているのが眼に入った。

「先に行ってるぞ渚！！あんまり遅れんなよ！」

「えっ？あつ！ちよつと！！」

速攻で靴を履き替え、その少女　渚に声をかける。靴を履き終わると同時に校舎の外に飛び出した。後ろから渚の声が聞こえるが、そんなことを気にしている暇はないのだ。

校舎を出て眩しい夕陽を浴びながら家路を急ぐ。家から学校までは歩いて15分程だから走れば7分もかからずに着くことが出来る。数分間、夢中で走り続けているとあつという間に家に着いた。

「ただいまー！！」

「おかえりー。あつ、頼まれていたゲーム二階に運んでおいたよ」  
家に入ると、今日は早いのか学校から帰った奏姉かなでさんが出迎えてくれた。リビングのソファに座りながら二階を指差す。その意味を素早く読み取った俺は「ありがとう」と言うと階段を駆け上がった。

二階の自分の部屋の扉を開けると確かにそれ《・・・》はそこにあった。

ソードアート・オンライン

パッケージにそう書かれた箱を手にとると、包装紙を破り捨てて中身を開ける。すぐさま机の上にあるナーヴギアを取って、ディスクを挿入した。

インストールまでの時間が待ち遠しい。ディスクが回っている音が静かな部屋に鳴り響いている。

どうして俺がこんなに興奮しているのか。

それは俺は前にこのゲームをやったことがあるからだ。ごく少数しか当選することのないベータテストに当選した俺は、このゲームを始めると同時にすぐ虜になった。

従来のゲームでは絶対に表現することのできない臨場感。なにより自分の体を動かし、自分の体で世界を探索できるということの楽しさは、一度やったら絶対に忘れることは出来ないだろうと俺は思う。

数十分後、インストール完了のサインが出されると同時に俺はナーヴギアを頭にはめ、魔法の言葉を口にした。

「リンク、スタート」

そう発したと同時に全身の力が抜ける。とてつもない虚脱感に襲われるが、俺の場合ベータテストで散々経験したため、段々とこの感覚にも慣れてきている。むしろ数カ月離れていた分懐かしい気分になった。

そして指の先すら動かすことが出来なくなった後、俺は静かに眼を閉じるとそのまま仮想空間へと意識を飛ばした。

? ? ? ? ?

眼を開くと次に目に入ってきたのは人々が入れ乱れている光景だった。その中にはそこで出会った仲間と談笑する者や、パーティーに誘って共に狩りに出かけようとする者、丹念に己の武器を手入れしている者などその様子は様々である。

「とりあえずスキルと装備を確認しなきゃな……」

ハヤトはそう呟くと、自らのメニューウィンドウを開き確認を始めた。これはこういったMMORPGでは基本中の基本である。モンスターとの戦闘になった時、自分に何が出来るか、何をすれば良いかを分かっているなければ生き残ることなど到底不可能な話である。ましてやこれはVRMMOなのだ。一瞬の迷いが生死を左右する中で装備を確認しないなどハヤトにとっては信じられないことである。

そしてこの ソードアート・オンライン で重要な要素となるのが今ハヤトが確認を行っている ソードスキル だ。従来のMMORPGには当たり前のように存在していた魔法や呪術といったシステムの者はこの ソードアート・オンライン には一切存在しない。その代わりとなるのがこの ソードスキル である。自らの体を用いて、技を発動させる。これはフルダイブ環境で得ることのできる体感を最大限に発揮するものであった。

無論、ベータテストをやっているもの 通称ベータスターでもあるハヤトはこの ソードスキル の重要さを十分に分かっている。

「……………なんだこれ」

武器の確認を一通り済ませ、スキルの確認を始めた時、ハヤトはある異変に気が付いた。ソードスキルの欄をスクロールさせていく中で、ふと奇妙なものが眼に入ったのだ。

「……………読めない」

本来日本語で書かれているはずのスキル欄には規則性のない、ただ並べただけの文字が羅列しており、とても普通の人間に読めるよ

うなものではなかった。それは俗に言う”文字化け”の類であり、バグとも言えるものなのである。

(茅場さんに限ってバグなんて有り得るのか……?)

いや、有り得ないとは言い切れないだろう。どんなに天才と世間で言われようと所詮は人間。間違いの一つや二つするし、ましてや世界初となるVRMMOなのだ。予期しないバグがあったとしても不思議はない。

「まあ、いいか」

考えていても仕方がない。そう思ったハヤトは一つ息をつくと思考を切り替え、人がごった返している中をすり抜けるようにして街の外へと出て行った。

? ? ? ? ?

最初にいた街　　はじまりの街　　の門をくぐって外に出ると、そこに広がっていたのは見渡す限りの草原だった。北は地平線が見えるまでに障害物が何もなく、東には広大な森、西には湖だろうか何かが激しく光っていた。

「さてと、とりあえずなんか狩ってみるか」

ハヤトは一つ大きく伸びをすると軽い口調で草原を歩き始めた。そして数分歩いたのち、前方に何やら青色の物体を見つける。

「イノシシ……?」

ハヤトの目の前では猪のような青色の毛むくじゃらの生き物が草原で草を食べていた。恐る恐る近付いてみるハヤトだが、猪は一向に襲いかかってくる気色を見せない。

「じゃあこつちから行かせてもらうか」

ハヤトはウィンドウを操作し、自らの右手にLv.1でも装備できる ショートソード を掴むと一直線に前方のイノシシへと駆けだした。どれだけ足音を立てて近付いていてもイノシシが反応する様子はない。しめた、とハヤトは手慣れた様子で身につけている ソードスキル を発動した。

だらり、と全身を脱力させ初動のモーションに意識を集中させる。ソードスキル において最も重要なのはこの初動なのだ。モーションにさえ入ってしまえばあとはシステムの補助がかかり体が勝手に動いてくれる。

ハヤトは剣を構え流れるようにその切っ先を振りかぶった。その瞬間、青色のエフェクト光が剣先に灯る。

「はっ！！」

気合いの一声と共に武術をしない人間とは思えない動きでイノシシへと肉薄する。ようやく攻撃を察知したイノシシは慌てて態勢を立て直すが時すでに遅し。振り下ろされたハヤトの剣がイノシシの体を一閃した。

イノシシの体が衝撃に耐えられず吹っ飛ぶ。地面の草に跡を残しながら転がっていくと、やがて止まりのしのと遅い動きで立ち上がった。

「まだ体力あんのかよ」

見ればイノシシのHPバーは赤色になっていた。それ即ち後一撃でイノシシは消滅するということ。ハヤトは止めの一撃を刺そうと蹴り足である右足に力を込めた。

だが命がかかっているイノシシもただ黙ってやられるわけにはいかなかった。持てる力の全てをひねり出し、決死の覚悟でハヤトへと突進を開始する。

その行動に思わず不意を突かれたハヤトであったが、そこはベータテスター。焦らずイノシシの突進にタイミングを合わせ、横にローリングすると同時にカウンターでイノシシの体に剣を叩きこんだ。ぶぎーと情けない声を出しながらイノシシは地面にひれ伏すと、特有のポリゴン音と共に消滅していった。

「まあ、最初だしこんなもんだよな」

呟いたハヤトの目の前に紫色のフォントで加算経験値の数値が表示される。まだLv.1ということもあり経験値を示すバーは一気に半分まで上昇した。

この事に気分を良くしたハヤトは玩具を与えられた子供のごとく眼を輝かせ、他のイノシシを探すべく草原を探索し始めた。

?  
?  
?  
?  
?

SAOにログインしてから数時間後。ここでポップするモンスターは《剣術》を使えば一撃で倒せる様になってきた頃、ハヤトはある決断をした。

(使ってみるか……)

スキルを確認していた時に見つかった謎のバグ。ハヤトはその文字化けのスキルを使おうとしていた。もし何らかの故障で動けなくなり、モンスターから攻撃をくらったとしても今のハヤトのレベルならばHPバーは1ドット程度しか減らない。それにHPが無くなったとしてもあの《はじまりの街》に戻るだけなのでそこまでの心配はいらなかった。

そう考えたハヤトは手慣れた手つきでウィンドウを操作すると例の文字化けスキルを選択し、展開した。

「……………」

少し緊張した面持ちで何が起こるか待っていたハヤトだったが、いくら待ってもその何かが起こる様子はなかった。

しかし、一つだけ変化が起きる。ハヤトの視界の左上。そこに黄色のフォントで時計が現れたのだ。それは制限時間のようで刻一刻とその秒数を減らしている。

「訳が分からん」

つい独り言をぼやいた。何か起きるかと思ったのに何も起きない。とんだ拍子抜けを食らったハヤトにとってはぼやくのも仕方ないことだった。

そして訳の分からないまま秒数は減っていきやがてゼロになった。はあ、と思わずため息をこぼした途端、急にハヤトが膝から地面に崩れ落ちた。

（ …… なんだ？ 眩暈が…………… ）

堪らず頭を抱え込むハヤト。視界がぐるぐると焦点が定まらない。体は言うことを聞かず支えているのがやっとだった。手足を動かさずとも指先程度しか動かさず、数分の間ハヤトはそこにうずくまっていた。

? ? ? ? ?

「……………はあ、ハア」

ようやく眩暈がおさまり、僅かながら違和感が残ってはいるが体は動かせるようになってきた。

ハヤトは何度か深呼吸をして体の状態を確かめる。

体が酷く気怠い。ベータテストの時つけた毒のような感覚がしている。

(一回帰ろう……………)

ハヤトはこの気怠さから逃れるためにウィンドウを開きログアウトボタンを押そうと試みる。

(ログアウトボタンが……………ない、だと?)

いくら探しても目当てのボタンを見つけないことが出来ない。MMORPGならばあって当然のボタンがそこには存在しなかった。

これには流石のハヤトも困惑するしかなかった。もしも何かしらの呼称だとしたら数あるバグの中でもこれは最悪の部類に入るだろう。何しろこの仮想空間から抜け出す術はこのログアウトボタンを押すに以外無いからだ。もちろん外部からナーヴギアを外すなどの強硬手段に出れば抜け出すことはできるが、その場合ナーヴギア自体が故障しかねない。

「なんぞそれは……」

体がだるいせいで怒る気力もない。とりあえず体調が良くなるまでここでじっとしてようと、ハヤトがそう思った時だった。

突如ハヤトの体を鮮やかな青色の柱が包み込む。粒子を伴い存在しているそれは、実に幻想的でファンタジー感が漂うものだった。

「レポート転移 ……!？」

この感覚には覚えがあった。ベータテストの時にもこの 転移 には散々お世話になったものだ。何分このSAOの世界は広すぎる。歩いていたんじゃないだけで日が暮れるという広さがあるのだ。

と、今はそんな悠長なことを考えている暇はなかった。段々と景色がぼやけ、色あせていく。そして一際強く淡い光を放ったかと思うと、俺の視界は一瞬ブラックアウトした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2567w/>

---

ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

2011年12月21日00時52分発行